[エッセイ]

日本語スピーチコンテスト参加を通じた留学生理解

芝﨑　理恵

山陽小野田市立山口東京理科大学　共通教育センター　非常勤講師

Understanding International Students through Their Participation in The Japanese Speech Contest

Rie SHIBASAKI

Adjunct Professor, Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

要　約

日本語を母語としない日本語学習者を対象とした日本語スピーチコンテストが，国内外で数多く実施されている。本学の留学生も，地方で行われているコンテストに参加し，入賞している学生もいる。

コンテストへの参加は，留学生本人の日頃の日本語学習の成果発表の場だと見られがちであるが，日本語学習の動機づけや自信につながるだけではなく，留学生活を振り返って内省をする機会を得，日本文化への理解など促進させる効果がある。また，周囲の人へ与えるインパクトも大きい。

本稿は，JLスピコンに参加した留学生や教職員の振り返りと日本人学生の感想文をもとに，それぞれにどのような変化が生じたかを概観し，留学生理解の一助とするものである。

Key words：キーワード：留学生，日本語スピーチコンテスト，留学生理解，国際理解

1．はじめに

日本人学生が大多数を占める本学において，留学生はマイノリティーである。研究室や授業，部活動，学習・履修相談等で留学生と同席にならない限り，学内で接触し，互いを理解し合う機会はほとんどないのではないだろうか。

本学の留学生が学内でスポットを浴びる1つの機会に，外国人による日本語スピーチコンテスト（以下，JLスピコン）への参加がある。JLスピコン参加は，単に留学生の日本語学習の成果発表の場であると見られがちであるが，本人や周囲に与えるインパクトは大きい。

菅（2019）の研究では，ある大学院でのJLスピコン実施・運営の準備から開催後までの効果を観察し「学生，教員，スタッフ間でのコミュニケーションの増加」，「教員スタッフが学生について知る」，「学生が将来に有益な情報や支援を受けられる」ことが確認された[1)]と報告している。本学では，JLスピコンは主催していないのだが，留学生が他の機関のJLスピコンに参加した際でも，留学生本人及びその周囲に与える影響は少なくないと考えられる。本稿は，JLスピコンに参加した本学留学生や教職員の振り返りと日本人学生の感想文をもとに，それぞれにどのような変化が生じたかを概観し，留学生理解の一助とするものである。

2．日本語スピーチコンテスト

菅（2019）は，JLスピコンを「日本語非母語話者が一定のテーマについて考えて発表の制限時間を考慮した日本語の文章を作成して人前で発表をし，それに対して審査員が評価・順位をつけて表彰する行事」と定義している。

本学留学生が過去 5 回参加したことのある日本国際連合協会山口県本部主催[2)]のJLスピコンも，外国人がテーマに沿って 6 分以内で発表し，内容 60 点，表現 40 点の 100 点満点で評価されるものであることから，本稿でもこの菅の定義を採用する。

現在，JLスピコンは，国内外で大小さまざまな規模で開催されている。日本国内の全国レベルのJLスピコンはレベルが高く，本学のように理系大学に所属する留学生がいきなりチャレンジするには心理的ハードルが高い。また，県内の文系大学でもJLスピコンが実施されているが，理系の留学生にとってはやはり敷居が高い。本学にも10年ほど前から留学生が毎年数名ずつ入学し始めたことから，日本国際連合協会山口県本部の事務局からJLスピコンの案内が届くようなった。同スピコンは県内在住の外国人（来日 5 年以内）と対象者が絞られており，「日本に来て生活をする中で感じ，考え，発見したことを題材にして，自分の経験・意見を日本語でスピーチする」というものである。また，テーマを自由に設定してもよいという点で，本学留学生にとっては比較的チャレンジしやすいJLスピコンであると考えた当時の留学生担当教員が，留学生に出場を勧めたことがきっかけで，本学留学生が同スピコンに出場するようになった。

3．それぞれの振り返りと感想

JLスピコンに参加したことのある本学の留学生5名，学内発表練習に関わった教職員 2 名に自由記述回答の振り返りシートに記入し，当時のことを振り返ってもらった。また，当時のスピーチ指導教員は筆者であったため，筆者自身もシートに記入し，当時を振り返った。

日本人学生については，2016 年の発表練習観覧後の感想文を概観した。

3．1 JLスピコンに参加した留学生の振り返りから

3．1．1 参加前

本学留学生は全員，JLスピコンについて教員や友人から情報を得ていた。留学生は課外活動の情報を能動的に収集しようという動きが弱いが，身近な他者からの情報伝達や勧めがあれば，主体性を発揮し，自ら参加を望むことがわかった。

原稿を書く際に，「内容の構想やアイディアなどの面で苦しんだが，自分の考えを日本語で言語化，記述できたことで達成感が生まれた」とほとんどが回答した。また，スピーチ練習でも「母語との発音の違いに苦しんだが，うまくできるようになるとうれしかった」という回答が見られ，原稿執筆でもスピーチ練習でも練習後に達成感を感じていたことがわかった。

また，日本人らしい発音を「正しい発音」だと思い，自分が「間違った発音」で話して恥ずかしいという考えを持つ留学生がいることもわかった。

学内の講義室や語学授業での発表練習は，全員が「恥ずかしかった」，「緊張した」と答えた一方で，発表練習後には「本番の役に立った」，「友達や学生，先生たちに応援してもらえてうれしかった」と学内発表練習を肯定的に捉えたことがわかった。

3．1．2 参加後

JLスピコン参加後は全員から，「すばらしい体験ができた」，「新しいことにチャレンジして，達成感があった」，

「自信がついた」,「視野が広がった」などと肯定的な回答が得られた。また,「会場でいろんな国の出場者と交流できた」こともよかったと回答するものもいた。

JLスピコンに参加した前後で自分が変化したことについては,「日本語自体が上達したように感じ, 日本語学習動機が上がった」,「日本の生活や文化への理解が更に深まった」,「以前よりも周りの日本人に自分から話しかけるようになった」など, 自分の考え方や行動に変化があったと全員が回答した。

周囲の変化としては,「学校でみんなによく話しかけてもらえるようになった」,「日本人の友達が増えた」,「周囲に頑張りを認めてもらえた」という回答が得られた。変化なしと答えたのは 1 名のみだった。

３．１．３ 今の生活への影響

「大勢の人の前でもスムーズに発表できる」,「苦手なことでも挑戦するようになった」,「性格が明るくなり, 友達が多くなった」,「前向きになった」,「自信がある」,「就職活動の時にJLスピコンの参加体験をアピールできた」などと, JLスピコン参加から数年たった後でもその成功体験が今の生活によい影響を与えていると全員が感じていることがわかった。

３．２ 学内発表に関わった教職員

３．２．１ 語学教員の振り返りから

人前で話す練習の機会として英語教員に授業を利用して発表練習の場を提供してもらった。当教員によれば,「打ち合わせで話をする機会が増え, (自分と)留学生が親しくなったように感じた」,「何となく(留学生の)雰囲気が堂々とし, いい表情になったように思える」と振り返っている。また, 発表練習を聞いた日本人学生の様子について「 1 クラス 60 人前後のクラスで発表してもらった時に, はじめて留学生がいると気づいた日本人学生もいたのではないか」,「日本人よりも日本のことをよく考えている」,「留学生が外国語である日本語でこんなにうまく自分の考えを述べている」と日本人学生が驚いていたよう感じたことを挙げている。

３．２．２ 事務職員の振り返りから

人前で話す練習の機会として, 事務職員に講義室を予約してもらい, 何度か公開練習を実施した。同職員は, ある留学生がテーマ決めのアイディア出しに悩んでいた時に相談にのってくれたうちの一人でもある。留学生がJLスピコン参加後に変化したこととして「積極性が出た」ことを挙げた。また, 留学生が練習に取り組む様子を見て「他国での学修に対する姿勢を見習いたいと思った」,「日本人学生は留学生の発表内容を聞いて興味がわいたのではないか」と振り返っている。

３．３ 日本人学生の感想から

2016年にJLスピコンに出場した留学生の発表練習を聞いた日本人学生の感想文には, ネガティブなものはほぼ見られなかった。「外国語で原稿を書いて, 暗記して発表してすごい」と日本語能力を褒めるもの,「スピーチ内容に共感した」,「スピーチを聞いて新しい気づきがあった」などのように内容そのものに対する意見,「私もこれから考え方や行動をあらためてみよう」というように自分の考え方に変化が生まれ, 行動を変えてみようと感想を述べたもの,「留学生や外国人とお互いの国のことに話してみたい」と国際交流に興味がわいたことなどの感想が多かった。

３．４ スピーチ指導した教員の振り返り

３．４．１ 参加前

筆者は, 本学からJLスピコンに参加したことのある留学生 5 名を指導した。

JLスピコンへの参加を進めても, 多忙を理由に断る留学生がほとんどだった。だが, 応募締め切りが近くなるとこの 5 名はやっぱり参加したいと意思表明した。教員や友人の勧めや励ましがあり, 心境に変化が生じたようだった。

JLスピコンの一次予選はスピーチ原稿の要約を提出しなければならなかった。留学生はテーマ決めに必要なアイディア出しにかなり苦戦していた。筆者は, 留学生と対話とメールを繰り返して, 留学生活を振り返ってテーマとなりそうな題材はないか検討させた。テーマを決めた後は, 留学生は数日で原稿を書き上げた。提出日ぎりぎりまで留学生自身が納得するまで推敲させた。

発表練習では, 聴解, 発声, 発音, アクセント, イントネーション, ポーズの取り方, 姿勢, 視線の配り方, ジェスチャー, 服装などの指導を段階的に行った。姿勢や視線, ジェスチャー, 服装などは国によって文化的な差異があるので, 留学生の出身国に配慮しつつ, 発表ではどのようにふるまうかを話し合い, 留学生自身に決定してもらった。1 回あたりの練習時間は 1 時間であったが, 練習中に実際に発声するのは 20 分ぐらいだった。残りの時間は喉を休ませるために休憩時間を取ったり, なぜこのテーマで話すのか, この段落を話している時はどういう考えや気持ちなのか話し合って, 内容への理解を深めさせ, 自分の言葉で聴衆に訴えかけるように話すことを意識させるよう

にした。学校生活やアルバイト，家族や友達，趣味，体調，将来や恋愛のことなどは関係ない他愛もないおしゃべりをすることも多く，普段留学生がどんなことを考えながら生活をしているか理解を深めることができた。

先述のとおり，英語教員や事務職員の協力を得て，学内発表の場を提供してもらった。スピーチ指導教員以外の人の前で初めてスピーチを発表する時，留学生はとても緊張していたようだった。しかし，人前での発表練習を何度か経験すると緊張に慣れるようで，うまくいった，うまくいかなかったと留学生は自己分析して筆者に報告してくれた。人前の発表練習をJLスピコンの 1 週間に集中的に行った後，留学生は自信に満ちた表情で大会当日を迎えた。

３．４．２ 参加後

参加後は，本人が望む結果が出ても出なくても，どの留学生もとても晴れ晴れしていた表情を浮かべていた。応援してくれた留学生仲間や練習に協力してくれた教職員に感謝の気持ちを述べたり，あいさつ回りをしていたり，「知らない日本人学生に話しかけられた」と言って喜んでいたのが印象に残っている。また，JLスピコン参加後は，日本語学習や課外活動にも積極的に取り組むようになったと感じた。

４．まとめ

留学生は，JLスピコン参加前後で，日本語学習動機があがったり，自信がついたり，性格が明るくなったり，その成功体験が数年後の今の自分や就職活動に良い影響を与えているという変化を感じていたことがわかった。日本人学生は，留学生が外国語である日本語で流暢に話すことに驚き，スピーチ内容を聞いて自分の思考が深まったり，外国や外国人に対する興味が沸いたと感じていた。教職員は，留学生が学内発表やJLスピコン参加後に積極的になったり，自信がついたという変化を感じていた。また，学内発表の打ち合わせをする中で親しくなった気がしたと感じていた。スピーチを指導した筆者は，留学生の日本語能力の向上や日本や母国の文化に対する理解などの深まり，筆者以外の日本人学生や教師との人間関係が変わったように感じた。

以上のことから，本学留学生がJLスピコンに参加した変化は，菅（2019）の研究で明らかになった，「学生，教員，スタッフ間でのコミュニケーションの増加」，「教員スタッフが学生について知る」，「学生が将来に有益な情報や支援を受けられる」という効果と概ね合致している。

５．今後の課題

本稿では，JLスピコンに参加した留学生，発表練習を聞いた日本人学生，学内発表に関わった教職員，指導教員の振り返りや感想から各自の変化を概観した。

今回は振り返りシートと感想文をもとに変化を概観したが，データが少なく，各自にどんな時にどんな変化がなぜ起きたのか詳しく考察することができなかった。今後，インタビューを実施し，より詳細なデータを得て検証したい。

また，筆者は，留学生と日本人学生との接触機会を増やすチャンスをセッティングすることは留学生の日本語授業を担当する講師の役割の一つであると考えている。しかしながら，筆者は留学生以外の授業は担当していないので，日本人学生と知り合う機会がほとんどない。今後，常勤講師や事務との連携を図りながら，留学生が日本人学生や教職員と交流できるような活動を提案していきたいと考えている。

参考文献

１）菅陽子：日本語スピーチコンテストの効果に関する一考察－国際会計政策大学院（東北大学）での実践を事例としてー，『*東アジア日本学研究*』，創刊号，P43-50，2019，P50

２）日本国際連合協会山口県本部：*外国人による日本語スピーチコンテスト募集要項*，http://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/index.html（最終アクセス日2021-11-11）